

はじめに一東アジア近代史とラジオ放送

1920年代の東アジアをメディア史という観点から捉えるときに、ラジオ放送の誕生はひととき大きな意味をもつ。

従来の新聞、雑誌など活字を用いた情報の伝達はいずれも活字を媒体にするがゆえに生じる「時差」を克服することができなかった。しかし、「空中」の電波を通じた情報の伝達は遠く離れた遠隔地の人々がそれぞれの地で同時に情報を共有することに可能にしたのである。また、1920年代の東アジアのラジオ放送は近代的な「国民国家」と「国民」の建設にも大きな役割を果たしたものと思われる。例えば、日常生活における天気予報、標準時刻、ニュースという「常識」を共有する国民の登場は近代的な国民国家形成に必要不可欠なものであつたらうことは容易に推測できよう。

しかし、東アジアのラジオ放送の発展はきわめて歪んだ形の道を歩むことになる。特に、1930年代の満州事変、上海事変、日中戦争という「戦争」を経験するたびに技術的な進歩をなし遂げるラジオ放送は戦争と表裏一体の関係で発展していった。それを端的に現しているのが、1930年代中ごろに台湾と朝鮮という植民地と満州国、そして、中国の一部を含む「大日本帝国」を中心にした放送勢力圏が成立したことであろう。例えば、1938年版の『ラジオ年鑑』はその状況を次のように述べる。

「日本のラジオは内地一円は『社団法人日本放送協会』、台湾は『社団法人台湾放送協会』、朝鮮は『社団法人朝鮮放送協会』が夫々独占経営する所であり、樺太及我が委任統治領南洋には未だ放送施設なく日本放送協会の聴取区域に属し、関東州を含み満州一円に於ては『満州電信電話株式会社』が之が経営の衝に当って居るが、四者俱にその運用には緊密なる連絡を採り、相提携して日満文化の興隆とその交流に資している」¹

いいかえれば、台湾と朝鮮半島は1945年の解放を迎えるまで、日本語によるラジオ番組を一日中、そして365日聴取するという異常な事態を経験していたのである。韓国ではいまでも韓国の放送史の始まりを戦前の京城放送局(コールサイン JODK)におくべきなのか、または解放以後の「中央放送局」におくべきのかをめぐって議論が分かれている²。

東アジア(日本と中国を含めた)のラジオ放送が、とくに「政府」による電波と情報の「統制」の上になりたっていたことはラジオ放送と戦争との関連を考えるときに再度、吟味されるべきであろう。

とくに、日本の場合はラジオ放送が国策に順応し、国策を代弁する異常な事態が長期間にわたっていた。例えば、日中戦争勃発の一年後の『ラジオ年鑑』(1938年)は「支那事

変とラジオの活動」という特輯のなかで「ラジオは全機能を挙げて戦時体制下の国策に順応し其の遂行に寄与する事に万全を期して居る」ことを冒頭で述べた後、「そのほか時局に関連した特輯番組としては皇室尊崇日本精神振作を一層国民に徹底せしむるため四大節国民奉祝の時間」の特別放送を実施し、8月1日～24日まで「国民心身鍛練期間」、9月22日よりの「国民協力週間」、10月13日よりの「国民精神総動員強調週間」、12月3日よりの「国民精神総動員産業週間」等には夫々政府と協力して其の趣旨の徹底を期するため各種の特別番組を放送した」ことが述べられている。

そして、太平洋戦争の勃発はラジオ放送と戦争協力の実態を余すところなく見せてくれる。『ラジオ年鑑』1942年に掲載された「戦争と放送」は、総力戦における放送が担当すべき使命として、放送の「国家的管理」を取り上げ、放送宣伝は武器を持たない作戦であると位置づけ、「我が国（日本）の放送」は次のように宣言する。

「アジアの盟主たるわが国は、アジアに於て最も組織化された放送事業を有しており、聴取者数、放送局数、使用電力…放送は実に一億国民を一瞬にして抱擁し、これを同一の思考と感情の響きの中に置く国民指導の近代的武器であると共に、戦時下にあっては姿なき大砲である。」

以上、東アジア近代史とラジオ放送との関連を論じるときに想定される幾つかの問題について触れてみたが、本稿はそのなかでも、日中戦争を前後した時期における日本側のラジオ放送の統制と上海でラジオ放送を始める日本語大東放送局（XQHA）の放送の実態などについて紹介を試みたい。

一. 上海のラジオ放送の始まり

中国放送事業の発祥地である上海で最初のラジオ放送が始まったのは、1922年の冬、アメリカ人のE.G.Osbornが上海の大来洋行の屋上に50ワットの放送設備を構え、Radio Corporation of China（中国名『中国無線電公司』）を組織したことを嚆矢とする³。

このラジオ放送の様子について『申報』は次のように伝えていた。

「(前略) 火曜日の夜から毎晩の8時からニュース、音楽、演説などを空中に伝播している。上海付近の無線装備と受信機を持つものは500箇所を下さらず、みな聴取できるという。昨日の午後にも試験放送を実施し、上海付近の船舶や北京、蘇州、南京等との電報交信も行なったという。また、上海からの音は極めて鮮明で遥かに奉天からも聴取できるという」⁴

その後、1924年の夏にはアメリカ人が経営する「ケログ社」（中国名は開洛公司、Kellogg Switchboard and Supply Co）が上海に100ワットの放送局（コールサインKRC）を設立し、広告とレコード放送を開始した（1929年、閉局）。上海を代表する中国系新聞の『申報』も早速、

無線電話部を設置し、ケログ社のラジオ放送を利用し、ニュースを報道し、上海の著名な音楽家である大同学会会長鄭観や中華音楽会会員（甘時雨、呂文成、楊祖永など）の演奏を企画した⁵。【表1】は1924年12月におけるケログ社のラジオ放送の番組表であるが、上海で娯楽番組を中心にラジオ放送が定着される過程をうかがうことができる。

【表1】1924年12月19日のケログ社放送時間

時間	番組	備考
午前9時45分—10時15分	中国と西洋音楽及び商業ニュース	日曜日を除き毎日放送
午後1時～1時半	西洋音楽	日曜日を除き毎日放送
午後6時～6時半	西洋音楽とニュース	毎週水曜日には午後8時～9時に特別音楽あり
午後8時半～9時	中国と西洋音楽及びニュース	日曜日を除き毎日放送、土曜日には特別番組あり
午後10時～11時半	西洋音楽	カールトンの舞踏音楽、毎日放送
午後7時～8時	日本音楽	日曜日放送

1927年には中国系資本の百貨店「新新公司」が屋上に50ワットの放送局（コールサイン XGX）を設置し、音楽・株式市況・ニュース・広告などを始めた⁶。その後、1931年の満州事変以後、上海には諸外国の放送局が急増することになるが、中国のラジオ放送を概観するとき特に注目すべきことは、国民党中央党部が1932年にドイツの「テレフンケン」株式会社による放送局を設立したことであろう。この放送局はコールサイン XGO A、空中線出力75キロワット、週率660キロサイクル・波長45メートルで当時、アジアにおいて最も性能の良い放送設備を備えていた。その後、国民政府の交通部は1935年にShanghai Radio Station (XGHC、美霊登電台・空中線出力250ワット・週率1300キロサイクル)を買収し、「上海交通部電台」（空中線出力200ワット・週率130キロサイクル）を運用することになった。この放送局は水晶制御式送信と同じマイクロフォンの設備を有し、放送は極めて明瞭で、フェーデイングもなく、Swinging（送信機の電波周波数が動揺するため受信感度に変化すること）も皆無であったという。

上海のラジオ放送の急速な発展は、放送開始後、僅か3年を経過していない時点で「都市の人々は言うまでもなく、農民、商人の家でもラジオ受信器を設置し、新聞に掲載されたラジオ番組を聞いており、娯楽を提供している。統計によれば、ラジオ販売の総数はすでに蓄音機の販売を超えている」⁷という『東方雑誌』の記事からも窺うことができよう。

勿論、聴取者からまったく不満がなかったわけではなく、例えば、ラジオ放送局が上海に集中しており、内陸部の人々はラジオを聴取することができず、ラジオ番組の内容は重複が多く、聴取者は放送の内容に食傷ぎみであることがラジオ放送に対する批判として頻繁に登場していた⁸。

「■■■」

【表 1】は 1934 年の中国のラジオ放送局設置状況を表しているが、そこからラジオ放送の急速な発展と共に、上海一極集中の現象をよみとることができる

【表 2】中国（北京・南京・上海）の放送局（1934 年現在）

地名	放送局名	週率 キロサイクル	呼称	電力
南京	中央	660	XGOA	75000
北京	交通部北京電台	950	XGOP	100
北京	育英中国	1190	XLKA	30
上海	眉壽堂	560	XLHA	15
上海	華泰	560	XLHB	15
上海	大東	580	XQHA	250
上海	華美公司	600	XMHA	500
上海	亞東	760	XLHJ	15
上海	東陸	640	XIHB	100
上海	華僑	700	XMHC	500
上海	同樂	720	XLHC	50
上海	快樂	720	XLHD	50
上海	建華	740	XHHB	100
上海	周協記	760	XLHI	15
上海	新新	780	XLHM	50
上海	敦篤堂	800	XLHK	15
上海	敦本堂	800	XLHL	15
上海	勞白生	820	XLHS	50
上海	福音	840	XHHA	100
上海	安定別墅	860	XHHD	100
上海	友聯	880	XHHV	100
上海	市政府	900	XGOS	500
上海	福星	920	XHHK	100
上海	李樹德堂	940	XHHE	100
上海	明遠	960	XHHF	100
上海	仏教浄業	980	XHHZ	100
上海	東方	1020	XHHG	100
上海	中西	1040	XHHH	100
上海	華美	1060	XHHI	100
上海	永生	1080	XHHJ	100
上海	亞美	1100	XHHS	100
上海	元昌	1120	XLHH	50
上海	亞声	1120	XHHW	100
上海	中華	1140	XHHL	100
上海	大中華	1160	XHHU	100
上海	鴻康	1180	XHHM	100
上海	國華	1200	XHHN	100
上海	利遠	1220	XHHO	100
上海	利利	1240	XHHY	100
上海	華興	1260	XHHD	100
上海	孫氏	1280	XIHA	50
上海	美靈堂	1300	XQHC	
上海	市音	1340	XLHZ	50
上海	華東	1360	XQHD	200
上海	新声	1380	XLHE	50
上海	社憲堂	1380	XLHF	15
上海	電声	1400	XLHO	50
上海	孔氏	1400	XLHD	15
上海	恆森	1420	XHHK	100
上海	鶴鳴	1440	XLHQ	15
上海	蓬萊	1440	XLHR	15
上海	其美	1460	XQHE	250
上海	華光	1480	XQHF	250
上海	楊氏	1500	XHHT	100

(出典：興亜院華中連絡部『支那に於ける放送事業発展の概況』1940年2月より作成)

その後、ラジオ放送は中国社会の映画産業と百貨店などの大衆消費文化の発展とともに商業ニュースと広告、そして、娯楽の提供という役割を中心に大きく発展して行く。

「都市生活者並び農村生活者の放送に対する興味、関心は非常なもので、就中国内大衆の大多数を占める非知識層にとって放送は娯楽機関であると共に其の日常生活に於ける諸々の出来事及生活環境に於ける諸種の事件を知り得る唯一の機関なのである」⁹

1935年当時の上海では、すでに総数100余りの放送局が営業を開始しており、とくにフランスの放送局は「Alliance Francaise」に属し、1日3回、各1時間半放送をしており、同局のプログラムのほか、徐家匯天文台の天気予報を放送し、フランス語及び中国語の講習番組を編成する他、夜はクラシック音楽のレコード番組を放送し、聴取者も多かったという。

このようなラジオ放送の急速な発展から考えれば、1932年当時、上海の諸外国人居留民の中、第1位の人口（約2万人）を占めている日本人が日本語のラジオ放送局をもつことを希望していた理由が良く分かる。

三. 日本語「大東放送局」XQHA¹⁰

上海のXQHA大東放送局が日本語を主とするラジオ放送を開始したのは1936年8月21日である¹¹。

しかし、この大東放送局の開局にいたる過程について今まで詳細が述べられることはなかったように思われるので、以下、大東放送局の開局にいたる経緯を中心に話しを進めてみたい。

上海での日本語ラジオ放送局の開局が試みられたのは、実はこの時期が最初ではない。

すなわち、1929年には電通社が「上海日々新聞社」後援の下で放送局を開局することを試み、1933年8月には新昌洋行が「林楽器店」にて放送局を開設する試みがなされた。しかし、これらの計画は間もなく中止になった。

1935年11月11日、中華民国特命全権大使の有吉明は「上海における『ラジオ』放送所開設方に関する件」という報告を外務大臣に報告している。

それによれば、上海に日本語放送局を設立することは上海在留日本人の要望でもあり、外務省としてもラジオ放送局の設立を強く希望していたことがわかる。

上海の日本人居留民を統括する上海総領事館はラジオの宣伝機関としての機能を充分承知し、「ニュース放送を指導し、当地陸海軍及び居留民団に随時これを利用せしめ」ることを放送局設立の当初から計画していた。この計画は上海に駐屯する陸海軍からも賛成をえたことで、いよいよ実現に向かうことになった。

計画の最初は日本本土からのラジオ放送を聴取する方法も考慮された。しかし、上海の聴取者が保有する受信装置は日本からの電波を受信することができなかった。そこで、上海の共同租界に放送局を開設する計画が浮上することになった。

上海総領事館側は上海現地の新聞社等に補助金を与えて放送局を運営すれば、事務費、

家賃などで節約ができ、一ヶ月約 1000 ドルをもって放送局の経営が可能である、と見積もっていた。しかし、聴取料金をとる制度がなく、広告による収入も期待できない上海で、ラジオ放送局の収支を合わせることは簡単なことではなかった。

ここで、Howard（アメリカ人）が所有する放送局 XQHA（580KC、5172m、共同租界 Love Lane 80 号）を買収する話が飛び込んできた。この放送局は共同租界の中央部に位置し、すでに、上海で高い評価を得ており、買収の可能性が積極的に検討された。

1936 年 5 月には「上海放送局設置問題打合会」が外務省第二会議室で開催され、同放送局の買収が決定し、大東放送局は 8 月 21 日より日本語放送を開始した。

しかし、中国における日本のラジオ放送の実施は中国側の許可をえなければならない。

日本は 8 月 18 日、国民政府の交通部上海電報局に対し、XQHA の営業許可をえたい旨を通報した。しかし、中国側は 1932 年に公布した『民営広播電台暫定取締規則』第 11 条の放送局の「ライセンス」は他に譲渡又は転売することができない条項を取り上げ、放送局の営業許可を認めない、という通告を出した。

中国政府は 8 月 23 日にはチャイナプレスに声明文を發表し、XQHA の譲渡は不法であり、規則によれば所有権の譲渡は交通部に登録する必要があることが再三にわたって確認された。日本側はこのような中国側の放送局不許可方針に対して同取締規則は治外法権を行使できる日本人には適用されないという見解をもって対応し、放送を強行した。

大東放送局は開局後、(1) 放送局の運営資金の確保、(2) 放送電波に対して中国側の妨害電波の発信という二つの難関に悩まされた。すなわち、1937 年 1 月 29 日、交通部は大東放送局の放送が不法であるので、コールサイン及び波長を取り上げるにつき広播を停止し、機械を撤去すべき旨を通知してきたのである。中国側は 1 月 10 日頃から XQHW というコールサインで大東放送局と同一の波長の電波を流し、東京からの中継とニュース放送を遮断するという強硬な措置をとった。

早くも、日・中間のラジオ放送をめぐる激しい攻防が上海を舞台に展開されたのである（以上、外務省外交史料館『在支滿本邦放送局関係雑件』（請求番号：F-2-3-2-9））。

四. 日中戦争と大東放送局

大東放送局開局の翌年 1937 年 7 月、日本と中国は戦争状態に突入した。大東放送局はこの戦火の影響を受け、放送は中断と復旧を繰り返した。

そして、占領地が拡大されるにつれ日本は大きな宿題を抱えることになった。中国におけるラジオ放送の強化をどのように進めるべきなのか、という重大な課題の解決を迫られた。

当初は大東放送局を増強する方法も検討されたが、1937 年の 9 月の日本放送協会より派遣された放送技師による調査の結果は、中国内陸への放送のため 2000 キロワットの短

波ラジオ局を新設する必要があるというものであった。上海に新たな大出力の放送局を設置することは、陸軍の強い要望とも合致していた。

このラジオ局の新設は日本放送協会の協力を得た上、早いスピードで工事が進み、1937年12月には上海の日本人倶楽部の四階にスタジオを設けた「大上海放送局」が正式に放送を開始した。コールサイン XOJB、900KC の華中地域最大の放送局の誕生である。

石坂氏によれば、大東放送局と大上海放送局の最も大きな差異は、大東放送局が日本人居留民を対象にした日本語番組の放送を中心にしたのに対して、大上海放送局は中国人の聴取者を対象に中国語と英語によるニュースや時事解説などの放送事業を展開したことにあるという。

確かに、1938年に入ると外務省は独自の立場から対中国宣伝及び時局に対する居留民指導を開始する時期がきたという認識のもと、大東放送局の単独経営を希望する動きも一部には見られた。

しかし、戦局の悪化につれて、このような役割分担自体が意味をもたなくなる。

福田敏之『姿なき尖兵—日中ラジオ戦史』(丸山学芸図書、1993)は日中戦争以後の「大東放送局の活躍」を次のように述べる。「何しろ開局当時、約3万人だった在留邦人が(昭和)12年から13年にかけて、実に10万近くにも膨れ上がった。加えて、上海近郊には進駐駐屯している多くの日本軍将兵がいる。その10余万にもものぼる日本人たちが『正しいニュース』を求めて大東放送局580サイクルだけにダイヤルを合わせていた。」

中国と日本向けに国策を宣伝するために様々なラジオ番組が製作され、1937年の大晦日には特別番組として満州と中国、日本を結ぶ番組が企画された。また、前線で戦う兵士の声を録音し、東京から放送する「戦地たより」は人気を集めたという。

この大東放送局のラジオ放送を孤島上海の人々はどのように聞いていたのだろうか。『広播周報』(1939年9月14日)は次のような記事を掲載している。

「敵人(日本)側はXQJBラジオ放送局の他にXQHA(大東放送局)を設置しており、両方とも日本政府の統制下に置かれている。その番組は普通の番組を装っているが、放送局は完全に軍人に統制されて居る。それ故に外務省文化局は大量の資金を日本文化の宣伝に投じているが、上海の日本の軍官らはこれらなことには全く興味がない。上述した二つの放送局は敵人(日本)が上海でラジオ宣伝をする大本営である。」

まもなく、大東放送局は大きな変貌を要請された。中国に対する宣伝工作、特に占領地域内での中国の人々及び華僑を対象にする華中地域における放送計画全体の根本的な見直しが必要になったのである。

ここで登場したのが、「中支放送協会」設立案である。中支放送協会は日本と中華民国維新政府の指導の下に特殊社団法人たる中支放送協会を設立し、華中地域の放送事業を統制・運営することをもくろんでいた。ラジオ放送が重点を置くべきところは次のような項目であった。

(1) 日本の陸・海軍作戦に関する公式発表、(2) 占領地内とくに上海を中心とする中国人の指導と宣伝、(3) 日本居留民と出征兵士に対する慰問、(4) 中国奥地への短波宣伝放送、(5) 現地在住の外国人に対する宣伝放送。

以降、大東放送局は中華民国維新政府との複雑な交渉をへて、1941年12月に「中国広播協会」の設立と同時にその傘下に入ることになる。

大東放送局は大上海広播電台の第2放送（日本語放送）としてコールサインも XGOH に改称され、1945年の敗戦まで放送を続けた。（以上は『在支満本邦放送局関係雑件』（請求番号：F-2-3-2-9を参照）。

【参考文献】

上海通社編『上海研究資料一統編』（上海書店、1984年版）

上海市档案馆他編『旧中国的上海広播事業』（中国広播電視出版社、1985年）

上海市档案馆編『上海市档案馆簡明指南』（档案出版社、1991年）

日本放送協会編『ラジオ年鑑』1938年版、1941年版（大空社、復刻版）

興亜院華中連絡部『支那に於ける放送事業発達の概況』（興亜院、1940年2月）

日本放送協会編『放送五十年史』（日本放送出版協会、1972年）

福田敏之『姿なき尖兵一日中ラジオ戦史』（丸山学芸図書、1993）

外務省外交資料館所蔵『在支満本邦放送局関係雑件』（請求番号：F-2-3-2-9）

石坂丘「植民地時代『台湾の放送』20年」（『放送研究と調査』1996年6月）

石坂丘『『抗日』のなかの上海・大東放送局』（『放送研究と文化』1996年10月）

ノチョンパル『韓国放送と50年』（韓国ナナム出版、1995年）

【付記】本稿は「上海的無線広播与日語大東広播電台 XQHA」（上海市档案馆編『租界里的上海』上海社会科学出版社、2003年）の原稿に訂正を加えたものである。とくに、日中戦争と華中地域の部分について

1 日本放送協会編『ラジオ年鑑』1938年

2 ノチョンパル『韓国放送と50年』ナナム出版、1995年

3 上海通社編『上海研究資料一統編』（上海書店、1984年復刻版）、714頁。

4 『申報』1923年1月22日。12頁

5 『申報』1923年5月24日。18頁

6 「上海広播無線電台的発展」『上海研究資料一統編』上海通社編、1984年版。興亜院華中連絡部『支那に於ける放送事業発達の概況』1940年2月を参照）。

7 「三年来上海無線電話之情形」、『東方雜誌』1924年8月

8 前掲『旧中国的上海広播事業』

9 （前掲『支那に於ける放送事業発達の概況』）

10 以上、外務省外交史料館『在支満本邦放送局関係雑件』（請求番号：F-2-3-2-9）

11 石坂丘『『抗日』のなかの上海・大東放送局』『放送と研究』1996年10月号